ブラジルにおける日系社会の言語保持と自己同一性との関係

ソーニア・レジナ・ロンギ

Ⅰ．問題の提案

ブラジルへの移住は1908年にはじまり、現在ブラジルにおける日系人口は、75万人にのぼると言われている。日本国外における最大の日系人集団であるにもかかわらず、ブラジル日系人に関する研究は比較的少ない。

海外日系人社会においては、自己同一性が行動の決定につき重要な要素とされている。この問題に関しては、1970年と1973年にマツモト・G、マスダ・M、メレディス・G、と長谷川真がホノルル、シアトルと立川市で行ったアンケート調査で、三世代にわたって、自己同一性を調査した。そのために、50項目の“Ethnic Identity Questionnaire”が作成された。これは、日本的なもの（食物・映画など）、性格特徴、道徳、家族関係、性の役割、差別、結婚に対する考え方、異人種に対する態度などで構成されたアンケート調査である。

ホノルルとシアトルの日系人に対する調査の結果として、世代ごとに日本的な自己同一性が、薄くなって行くことが判明した。

仮説のパターンとしてブラジル日系人の間でも同様の現象が起こっていると推定し、そして、その自己同一性が薄くなって行くにつれて、祖先の言語を保持する関心も薄くなるだろうという想定のもとで考察を行った。本考察においては、現在東京都とその周辺に在住するブラジル日系人をインフォーマントとして扱い、彼等の言語保持や自己同一性に対する態度を調査することにした。

II．方　　法

94項目のアンケート調査を作成し、それは二部からなっており、第一部は個人的な情報、言語保持に関する項目（17、18、19、22～28、30、32）と自項同一性を確認するための七つの項目（36、38、40、41、42、43、44）、そして、第二部は上述した“Ethnic Identity Questionnaire”（ポルトガル語訳）で構成されている。

言語保持項目の最高保持度に３点（但し、項目25には４点）を与え、最低度に１点を与えた。自己同一性項目に関して、第一部の七つの項目に最高点は３点で、第二部の場合に最高点は５点とし、両方の最低点は１点とした。個人にとっては、言語の保持度の集計は49点で、自己同一性の集計は 266 点である。

III．母　集　団

在日ブラジル大使館の週刊ニュースを受取っている人のリストおよび、日本国際教育協会の留学生のリストから東京都とその周辺に在住するブラジル日系人の名前を抽出し、70通のアンケートを郵送、または本人に直接手渡した。70通中で４通が宛て先不明で戻され、残る66通の中から、48％通が返送された。これは、すなわち、72.7％の回収率を意味する。

IV．結　　果

この母集団の45.8％は男性、54.2％は女性であり、年令の重複がかなりあったが、三つの年代別グループに分けた。(イ)グループは、20才から29才まで、(ロ)グループは、30才から31才まで、そして、40才から60才までを(ハ)グループに分け、それぞれが母集団の56.2％(27人)、37.5％(18人）および6.3％（３

人）を占めている。世代別の比率を見ると、一世が10.4%（５人）、二世が、83.3%（40人）および三世が6.3％（３人）となっている。そして、育った場所を今一つの大切な要素としてデータ処理を行うと、79.2%（38人）が日系人の多い環境で育てられていることが判明する。（但し、4.2%（２人）が無記入〕。

性別と年代別についてデータ分析を行うことにする。なお、世代別に関しては、母集団の規模が小さかったため、その差が明白に現われない場合があったが、必要に応じて参考にする。

Ⅳ．１．言語保持に関する分析

図表01と02を分析すると、日本語だけよりも、ポルトガル語と日本語の両方を使用する率がかなり高い。

図表01　家で話されている言葉の性別比率

性別 / 項目19	男性		女性		集計	
家で話されている言葉	人数	%	人数	%	人数	%
ポルトガル語	1	4.5	3	11.5	4	8.3
日本語	2	9.1	3	11.5	5	10.4
両方	19	86.4	20	76.9	39	81.3

図表02　家で話されている言葉の年代別比率

年代別 / 項目19	(イ)グループ（20才～29才）		(ロ)グループ（30才～39才）		(ハ)グループ（40才～60才）		集計	
家で話されている言葉	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
ポルトガル語	2	7.4	2	11.1	0	.0	4	8.5
日本語	4	14.8	1	5.6	0	.0	5	10.6
両方	21	77.8	15	83.3	2	100.0	38	80.9

その反面、両親が言語を保持しようとする努力をしていることが圧倒的に

見られることに対して、子孫がそれに応じようとする規模は比較的低い。

図表03　家で両親が子供に日本語を話させた性別比率

項目17　性別	男性		女性		集計	
両親は家の中で日本語を話させていましたか	人数	%	人数	%	人数	%
は　い	14	63.6	19	73.1	33	68.8
い　い　え	3	13.6	4	15.4	7	14.6
無　関　心	5	22.7	3	11.5	8	16.7

図表04　両親の希望にそう性別率

項目18　あなたはどれに応じていましたか。	男性		女性		集計	
	人数	%	人数	%	人数	%
は　い	11	50.0	10	38.5	21	43.8
い　い　え	0	.0	2	7.7	2	4.2
無　関　心	4	18.2	9	34.6	13	27.1
無　記　入	7	31.8	5	19.2	12	25.0

次に日本語教育期間の比率を見てみよう。

図表05　ブラジルでの日本語教育期間の性別率

項目11　ブラジルでの日本語教育期間	男性		女性		集計	
	人数	%	人数	%	人数	%
1年から5年まで	7	31.8	6	22.9	13	27.1
6年から10年まで	5	22.7	10	38.3	15	31.4
ナ　シ	10	45.5	10	38.5	20	41.7

図表06　ブラジルでの日本語教育期間の年代別率

項目11　ブラジルでの日本語教育期間	(イ)グループ		(ロ)グループ		(ハ)グループ	
	人数	%	人数	%	人数	%
ナ　　シ	11	40.7	6	33.3	2	100.0
1年から5年まで	7	25.9	6	33.3	0	.0
6年から10年まで	9	33.3	6	33.4	0	.0

注　(イ)グループ（20才～29才）
　　(ロ)グループ（30才～39才）
　　(ハ)グループ（40才～60才）

図表07　日本での日本語教育期間の性別率

項目11　日本での日本語教育期間	男　性		女　性		集　計	
	人数	%	人数	%	人数	%
ナ　　シ	13	59.1	18	69.2	31	64.6
1年から5年まで	7	31.8	6	23.0	13	27.2
6年から10年まで	2	9.0	2	7.6	4	8.4

図表06と08で見られるブラジルにおける日本語教育期間に関しては、女性の方が長く、来日してからの教育期間についてはほぼ同じである。図表09に関しては年代が低くなる程日本における日本語教育期関が長くなる。それが現われるのは、(イ)グループ（20才～30才）の場合であって、ほとんどの人が留学を目的として来日したので、それぞれの研究のため日本語の能力が十分でなかったことから、さらに日本で日本語の学習を行うことが必要であったことによって説明されるであろう。

母集団全体からは66.7%が来日してから自己の日本語能力が向上したと回答し、29.2%が大体良くなったと回答している。

現在までの滞日期間に関しては、母集団の77.1%（男性16人と女性21人）が6ヶ月ないし4年の割合で、23%（男性6人と女性5人）が、4年以上の割合を占めている。

図表08　日本での日本語教育期間の年代別率

項目11　日本での日本語教育期間	(イ)グループ		(ロ)グループ		(ハ)グループ	
	人数	%	人数	%	人数	%
ナ　シ	16	59.3	14	77.8	1	50.0
1年から5年まで	9	33.3	3	16.7	0	.0
6年から10年まで	2	7.4	1	5.6	1	50.0

次にインフォーマントの両親のポルトガル語の習得度を検討する。

図表09　両親のポルトガル語の習得度・インフォーマントの性別率

両親のポルトガル語の習得度	男　性		女　性		集　計	
	人数	%	人数	%	人数	%
非常によい	0	.0	2	7.7	2	4.2
よ　い	10	45.5	9	34.6	19	39.6
普　通	12	54.5	14	53.8	26	54.2
無　記　入	0	.0	1	3.8	1	2.1

ここでの「普通」の意味は日常会話にやや間に合う程度の語学能力であり、男女両性の回答の平均となっている。これが図表01において、家の中で両方の言語が使用されていることの高率を裏付けているものと思われる。世代別の分析を行っても同様の傾向が見られる。

図表10　両親のポルトガル語の習得度・世代別率

両親のポルトガル語の習得度	一　世		二　世		三　世	
	人数	%	人数	%	人数	%
非常に良い	0	.0	1	2.5	1	33.3
良　い	1	20.0	18	45.0	0	.0
普　通	4	80.0	20	50.0	2	66.7
無　記　入	0	.0	1	2.5	3	.0

インフォーマントに関していえば、日本語能力の差がみられ、世代の分析

について、仮説のパターンを裏付けている。そして、1世から3世への世代順ごとに理解する→話す→読む→書くの順に推定のごとく日本語の能力が減じていることが確認された。

図表11　世代別に日本語能力の率

日本語の能力程度	話す			読む		
	一世	二世	三世	一世	二世	三世
非常に良い	5人 100.0%	11 27.5	0 .0	4 80.0	3 7.5	0 .0
良い	0 .0	20 50.0	0 .0	0 .0	12 30.0	0 .0
普通	0 .0	7 17.5	2 66.7	1 20.0	14 35.0	1 33.3
まあまあ	0 .0	1 2.5	1 33.3	0 .0	10 25.0	2 66.7
無記入	0 .0	1 2.5	0 .0	0 .0	1 2.5	0 .0
日本語の能力程度	書く			理解する		
	一世	二世	三世	一世	二世	三世
非常に良い	1 20.0	1 2.5	0 .0	4 80.0	6 15.0	0 .0
良い	2 40.0	6 15.0	0 .0	1 20.0	22 55.0	0 .0
普通	1 20.0	16 40.0	0 .0	0 .0	11 27.5	2 66.7
まあまあ	1 20.0	16 40.0	3 100.0	0 .0	1 2.5	1 33.3
無記入	0 .0	1 2.5	0 .0	0 .0	0 .0	0 .0

言語の保持度と大いに関係していると思われるのは、日本語ができることが利点だと思うという項目に対して、95.8%が「はい」と答えていることである。また、79.2%が日系人の多い環境で育てられたことからもうかがわれる。

以上、言語保持度に関するデータを分析し、最後に言語保持項目の集計を

分析してみる。

言語保持項目の性別分布では男女の差がほとんど表われない。男性の平均は74.8％（SD: 1.2）で女性の平均は74.0％（SD: 1.0）となっている。従って、女性の方がより狭い幅に集中して居り、言語保持度につき女性の方が、わずかの差ではあるが、数多く同一の考えを有しているものといえよう。

世代別分布の結果は世代を重ねるにつれ、曲線が広がり、平均が低くなる。一世の平均は88.3％(SD: 7.3)、二世の平均は63.2％(SD:10.0)、三世の平均は63.2％（SD:12.4）となっている。世代別の分布は推定したように言語保持度の低化を示している。

図表12　言語保持項目の点数の集計・性別分布

	人　数	MEAN	S.D.	MAX	MIN
男　　性	22	37.4	6.0	48.0	23.0
女　　性	26	36.2	5.1	46.0	24.0
集　　計	48	36.8	5.5	48.0	23.0

図表13　言語保持項目点数の集計・世代別分布

	人　数	MEAN	S.D.	MAX	MIN
一　　世	5	43.2	3.6	48.0	40.0
二　　世	40	36.4	5.0	46.0	23.0
三　　世	3	31.0	6.1	35.0	24.0
集　　計	48	36.8	5.5	48.0	23.0

Ⅳ．2．自己同一性に関する分析

自己同一性に関する項目の分析を行う前に幾つかの項目の結果について考察を試みる。

宗教に関しては、45.8％の両親が仏教徒であるのに対して、子孫の8.3％のみが仏教徒であると自称した。すなわち、宗教の面ではかなりブラジルへの同化が見られる。カトリック信者が母集団の72.9％を占めている。

両親と子孫の両方とも仏教徒の者が3ケースしかないのに対して、両親が仏教徒で、子孫がカトリック信者であるのは17ケースもある。

図表14　両親と子孫の宗教的分布

子孫＼両親	両親の宗教					
子孫の宗教	カトリック	プロテスタント	仏教	その他	無記入	集計
カトリック	9	3	17	5	1	35
プロテスタント	0	2	0	0	0	2
仏教	1	0	3	0	0	4
その他	1	0	1	1	0	3
無記入	0	0	1	2	1	4
集計	11	5	22	8	2	48

次に、アンケートの項目38（あなたは「コロニア」（ブラジルにおける日本人一世及び日系人によって構成される集団）の一員だと思いますか。）に対する答えを見てみよう。

図表15　項目38の世代別分布

あなたは「コロニア」の一員だと思いますか	一世		二世		三世		集計	
	人	%	人	%	人	%	人	%
はい	2	40.0	12	30.0	1	33.3	15	31.3
いいえ	1	20.0	9	22.5	2	66.7	12	25.0
無関心	1	20.0	17	42.5	0	.0	18	37.5
無記入	1	20.0	2	5.0	0	.0	3	6.3

移住者にとって、「コロニア」つまり日系社会はもっとも重要な存在であるとされている。しかし、日系人が「コロニア」の存在を認めていても、自己のその中の一員としての認識は弱いように思われる。世代別の分布では、一世から三世への順序が弱まっている。なお、性別の分布では、その傾向が女性に強いことがわかる。

図表16　項目38の性別分布

あなたは「コロニア」の一員だと思いますか	男性		女性		集計	
	人	%	人	%	人	%
はい	9	40.9	6	23.1	15	31.3
いいえ	4	18.2	8	30.8	12	25.0
無関心	8	36.4	10	38.5	18	37.5
無記入	1	4.5	2	7.7	3	6.3

項目50（A Good Japanese background help to prevent young nisei from delinquency）を考えてみると、性別的にほとんど差が表われないし、そして母集団の大多数（75%）が自己同一性をみせない。この傾向は世代別の分布によって、一世から三世への順序でも明白となる。

この点については一世も低い自己同一性を示しているのは興味深い。

図表17　項目50の世代別分布

項目50	一世		二世		三世	
	人	%	人	%	人	%
大賛成	0	.0	0	.0	0	.0
賛成	1	20.0	6	15.0	0	.0
無決定	0	.0	3	7.5	0	.0
反対	2	40.0	17	42.5	1	33.3
大反対	2	40.0	12	30.0	2	66.7
無記入	0	.0	2	5.0	0	.0

項目62（It is better for the nisei assimilate with Brazilian culture）に対する性別的な差はなく、そして母集団の半分以上（58.3%）がそれに賛成をし、自己同一性の低化を表わしている。

項目56（It is all right for the nisei to become "brazilianized" but they should retain part of Japanese Culture.）に対して、母集団の70.8%がそれに賛成している。この結果は自己同一性を表す項目の集計平

均と関係しているものと思われる。というのは、ブラジル社会への同化が事実として認められ、そして同時に日本的とされる要素も共存するからである。

以下において自己同一性項目の点数集計を分析してみる。

図表18　自己同一性項目の集計の性別分布

	MEAN	S. D.	MAX	MIN
男　性	140.7	12.3	157.0	116.0
女　性	139.2	21.6	168.0	96.0
集　計	139.9	17.8	168.0	96.0

図表18をみると、自己同一性の平均は性別的にほとんど変らない。男性の平均は52.9%（SD: 12.3）と女性が平均52.3%（SD: 21.6）となっている。男女両性の75%が比較的に狭い幅に集中している。

図表19　自己同一性項目の世代別の分布

	MEAN	S. D.	MAX	MIN
一　世	143.8	21.2	167.0	116.0
二　世	140.7	15.1	166.0	96.0
三　世	122.0	39.8	168.0	98.0
集　計	139.9	17.8	168.0	96.0

世代別分布の結果として、仮説のパターンが確認される。世代ごとに曲線が広がり、平均が低くなっていく。一世の平均は54.0%（SD: 7.9）二世の平均は52.8%（SD: 5.6）と三世の平均は45.8%（SD: 14.5）となっている。むしろ一世→二世→三世のパターンへの結びつきは日本語への定着と密接に関係していると述べている。しかしながら、ブラジルにおいて日系人社会の一員となるためには、日本語はすでに必要とされなくなっているようである。フジイ、リン・スミスによれば、二世、三世間の新しい傾向は、ブラジル社会への同化過程に対する抵抗が少なくなってきているとのことである。

従って日本語の保持度が高率であっても、それは自己同一性の指標とはな

らない。

自己同一性の低率に関していえば、ブラジル社会においては、社会層間の動きが富と教育によって比較的自由であることに由来するのではないかと思われる。それ故にこのような社会においては同化はより早く、より簡単に行なわれるのではなかろうか。

結論として、Ｉでたてた仮説が世代別の分析によって証明されたが、母集団の数が少なかったことと、在日中の母集団のみの分析結果であることから言って、必ずしもブラジルの日系人を代表するデータではないと思われる。

なお、この考察の基礎となった母集団の大多数は留学の形で在日している人であり、あるいは日本語が出来るという条件で、ある特定の企業から派遣された人である。このような前提を基にすれば、このデータが示している言語保持度の高率は「コロニア」の現実を完全に裏付けていないと言える。

データの制限上、三世の傾向はより明確にすることができなかった。今後の課題としては、在ブラジル日系人の傾向を分析するため、日系人の大集団地であるサンパウロに於て同様の調査を試み、それを通じて、ある程度まとまった三世代とものデータをそろえることにしたい。

《参考文献》

Engebretson, D., Fullmer, D., "Cross-Cultural Diferences in Territoriality: Interaction Distances of Native Japanese, Hawaii Japanese, and American Caucasians" in JOURNAL OF CROSS-CULTURAL PSYCHOLOGY, Vol. 1, No. 3, 1970.

Fishman, J. A., "Language and Ethnicity" in Howard Giles LANGUAGE, ETHNICITY and INTERGROUP RELATIONS, Academic Press Inc., New York, 1978.

Fujii, Y., Lynn Smith, T., "The Acculturation of the Japanese Immigrants in Brazil" in LATIN AMERICAN MONOGRAPHS, No. 8, Jun. 1959.

Gardiner, H. W., Lematawekul, D., "Second-Generation Chinese in Thailand: A study of Ethnic Identification" in JOURNAL OF CROSS-CULTURAL PSYCHOLOGY, Vol. 1, No. 4, 1970.

Glaser, D., "Dynamics of Ethnic Identification" in AMERICAN SOCIOLOGICAL REVIEW, Vol. 23, 1958.

Hansen, M. L. "The Problem of the Third Generation Immigrant" in COMMENTARY, XIV, No. 5, 1952.

Johnson, C. L., Johnson, F. A., "The Japanese and Caucasians in Honolulu" in SOCIAL FORCES, Vol. 54: 2, 1975.

Léon, P. R., "Attitudes et Comportements Linguistiques, Problemes D'Acculturation et D'Identité" in ETUDES DE LINGUISTIQUE APPLIQUÉE, Vol. 13—16, 1974.

Matsumoto, G. M., Meredith, G. M., "Ethnic Identification: Honolulu and Seattle Japanese-Americans" in JOURNAL OF CROSS-CULTURAL PSYCHOLOGY, Vol. 1, No. 1, 1970.

Matsumoto, G. M., Masuda, M., Hasegawa, S., "The Ethnic Identity Questionnaire - A comparison of Three Japanese Age Groups

in Tachikawa, Japan, Honolulu and Seattle" in JOURNAL OF CROSS-CULTURAL PSYCHOLOGY, Vol. 4, No. 2, 1973.

Language Maintenance and Ethnic Identity among Japanese Brazilians.

Sonia Regina Longhi

It has been suggested that the ethnic identity of Japanese-Americans attenuates through generations. This is a case study to test this hypothesis, as well as its correlation with language maintenance among Japanese-Brazilians of three generations, who were by the time either studying or working in Tokyo.

The results were measured by a questionnaire with 94 items divided into 2 parts. The first part was related with language acquisition, usage and maintenance, and the second part was a Portuguese version of the Ethnic Identity Questionnaire used by Matsumoto et al in surveying Japanese-Americans.

The data was analysed in terms of sex and generation. Sex variable hardly proved relevant to the global analysis, but generation variable, although not so significantly, confirmed the hypothesis towards an attenuation of ethnicity and language maintenance, items which showed to be related to each other.

Due to the limitation of the sample, one can not say this case study is representative of the tendencies registered among Japanese-Brazilians. So, as a further step, I intend to conduct the same research in Brazil, where I could get a fairly representative number of the three generations of Japanese-Brazilians for more conclusive results.